

## 中国における社会思潮の変容と国語教育改革

武小燕<sup>1</sup>

### 要旨

グローバル化社会における今日の中国では、社会思潮の多様化が大いに進んでいる。特に近代中国の三大思潮と呼ばれる自由主義・社会主義・保守主義が長い年月を経て再び社会の表舞台でそれぞれの影響を發揮していることは、今日の中国を捉える上で不可欠な視点だと思われる。本稿では、まず歴史的な視点を踏まえてこの三大思潮の主張と変容を確認し、その後、改革開放期の国語教育についてその教学大綱と課程基準（日本の学習指導要領にあたる）および教科書に対する分析を行った。それによって改革開放後、一時に言論界から排除された自由主義と保守主義は、その影響力が知識人のなかで衰えておらず、特に90年代以降急速な展開を示しており、その影響が国語教育の改革にも及んでいることを明らかにした。社会思潮においても国語教育においても、民族化と普遍化を追求しながら、人文主義の重視と価値観の多元化が進んでいる。

キーワード：社会思潮，国語教育，語文科，価値志向，人文主義

### I. はじめに

21世紀以来、中国社会はWTO加盟にともない、いっそうの変化を迎えている。この変化は前の改革開放期に比べると、グローバル化の更なる浸透およびそれに伴う欧米的普遍主義と民族主義の両方が高まりを見せていることに特徴がある。たとえば、2004年の憲法修正では私有財産の合法性が認められ、2008年に一部の知識人による人権や憲政を提唱する「零八憲章」が出されたことは、官民のいずれにおいても欧米的普遍主義が影響力を拡大していることを示している。また、政府主導の孔子学院の世界的展開や民間社会における様々な伝統文化の復興運動は、国力の向上に伴う政府や国民の自信の高まりを示す同時に、自らのナショナル・アイデンティティに対する自覚を促す役割を果たしている。

こうした変化は制度改革や社会現象として表れるほか、学校教育にも影響を与えている。特に国民教育の基礎である国語教育では、従来の政治教育から人文精神教育へとその趣旨が変わった同時に、伝統文化を反映する中国古典も平和や愛の普遍的価値を反映する外国作品も2000年代以降大いに増えた。

本稿では、まず今日の変化に潜む社会思潮を歴史的な視点からとらえ、それから社会思潮を反映する具体例として、次世代の国民育成を担う学校教育の中で教育の文化志向を最も具現化する国語教育の変容を考察していく。こうした作業を通して、グローバリゼーションにおける中国社会の今日の変化は、どのような歴史的背景の下で可能となり、また次世代の国民育成については今後の中国社会にどんな影響を与えうるかについて検討する。

### II. 近代中国における社会思潮の変容

上記に見られる 2000 年代以降の中国社会の変化は、欧米的普遍主義に傾倒する自由主義と伝統文化に価値を置く保守主義の台頭だと見られる。この両者はかつて社会主義イデオロギーによる一元的支配の下で厳しく統制されたが、なぜ今日社会を動かす影響力を持つように成長できたのだろうか。それは 1978 年以來の改革開放政策または 90 年代以降拡大してきたグローバル化の影響に要因を求めただけでは、不十分のように思う。なぜならば、この時期における両者の成長過程を見れば、その論者たちは絶えずに近代中国の歴史をふりかえしながら、その反省から今日の改革の方向性を議論していることが分かる。つまり、両者の台頭はより根本的に、知識人たちが近代中国の進むべき道に対する模索の一部だと言える。そのため、グローバル化する今日の社会思潮を理解するには、その底層にある歴史的なつながりを踏まえて認識する必要がある。

### 1. 自由主義思潮の変容

近代中国の三大思潮と言われる自由主義・保守主義・社会主義のうち、いち早く知識人に影響を与えたのは自由主義であった。イギリス留学の経験を持つ清末の文人である嚴復は、19 世紀末から 20 世紀初めにかけてアダム・スミスやミルの代表作の翻訳を通して古典的自由主義思想を中国に大いに広げた。また、変法自強運動後日本亡命に強いられた梁啓超は、在日中に多くの西洋思想と出会い、その中で特にルソーやロックへの傾倒から共和国的自由主義の考えを広げることに関与した。この 2 種類の自由主義は、新文化運動において「法的自由」(Civeil Liberty) を重んずる英米型と「天然自由」(Natural Liberty) を重んずるフランス型と区別して認識され、それぞれの支持者を擁するに至った。

ところが、ロシアの十月革命後、両方の支持者に変化が生じ、「ユートピア的な社会革命」への支持から一部の自由主義者はマルクス主義者に転向した。それに対し、漸進的な社会改造を重視する英米型自由主義は、デューイ訪中とその弟子の胡適や陶行知による精力的な取組の下で影響力が増し、特にプラグマティズムが中国の自由主義者に大きな影響を与えた。さらに、1920 年代以降、資本主義と社会主義の折衷を図ろうとする社会民主主義志向も中国の自由主義者に影響を及び、後に「ソ連の経済的民主を以て英米の政治的民主を補う」<sup>2</sup> という第三の道を提唱して成立した中国民主同盟がその代表格である。

しかし、これらの自由主義思潮は、新中国成立後の政治運動の中で徹底的に批判され、社会の表舞台から姿を消した。それが再び中国社会に登場するのは、改革開放以降となる。1980 年代に自由主義を含める西洋思想の学術書が多く翻訳されるほか、民主や選挙を要求する学生運動も度々行われた。その後自由主義者たちは、1989 年の天安門事件で一時的に挫折を迎えたものの、1992 年以降政府が推進する市場経済路線に積極的にかわり、政権を批判する理想主義者から社会の再構築を図る現実主義者へと姿勢を転換した。その背景には、イデオロギー論を棚上げにして自由主義を受容し始める政府の姿勢転換と市場や市民社会の誕生によって自由主義者が活躍の場が得られたほか、新中国以前の自由主義思潮とりわけプラグマティズムの継承がその認識の根本にあることが見逃せない。たとえば、自由主義者の代表格である前記の胡適に関する研究は、長い間にタブー視されたが、90 年代以降ブームになるほど関心が高かった。さらに 2000 年代以降、「三つの代表」論や党規約の修正の下で、資本家の中国共産党加入が可能となり、実際に私営企業家におけるその党員の割合は 2000 年代後半 3 割台に上ってき

た。自由主義の影響は経済や言論界にとどまらず、政治の表舞台にも浸透を拡大している様子がうかがえる。

他方、80年代には専制政治に対して抽象的な人間の価値を提唱する自由主義は知識人のなかで強く求められたのに対し、90年代以降、具体的な人間像と社会像を求めるうえでその陣営が分かれてしまう。新中国以前の自由主義者に見られる多様な主張に対する継承と反省が行われ、今日の改革策に対する議論が止まない。

## 2. 保守主義思潮の変容

自由主義者と論争を繰り広げながら、新中国後共に批判の対象となったのは保守主義者であり、その代表格は新儒家と呼ばれる知識人たちである。自由主義が中国に紹介された当初から進歩的な思想と見なされてきたのに対し、伝統文化の価値を擁護する保守主義者の主張は近代中国で長らく陳腐的・封建的といった負のイメージが払拭できず、より激しい批判にさらされた。新文化運動における「孔子を打倒せよ」、文革における「旧思想、旧文化、旧風俗、旧習慣の打破」のスローガンとそれらの運動を想起すれば、その批判の痛烈さが分かる。

もっとも、清末の嚴復や康有為は維新を主張する際に、多くの古典を再解釈し、それに時代変革の意味を与えた。その趣旨は、梁啓超の「復古を以て解放とする」<sup>3</sup>という言葉に端的に表れる。実際に嚴復の訳書も康有為の「公羊三世」論もより古い時代の言葉や原典を再解釈することによって伝統文化に新しい息吹をもたらした。こうした批判的継承の視点に加え、第一次世界大戦後荒れ果てた欧州の現状を含む西洋社会の現状に対する認識が深まるなか、欧米的近代文明の限界を超越する新たな文明の模索から、伝統文化への関心が高まった。1920年代以降こうした関心は次

第に新儒学に発展してきた<sup>4</sup>。1949年まで、梁漱溟や馮友蘭などの新儒家は近代化というコンテキストの中で伝統文化をいかに解釈するかという理論探究を進めたほか、西洋化の論調が高まるなかで民族文化の主体性と民族文化への自信を呼びかける存在としても影響が大きかった<sup>5</sup>。

新中国成立後、新儒学は自由主義と共に批判され、その影響が台湾や海外にとどまった。改革開放後、伝統文化への関心は高まっているものの、80年代にそれを近代中国が遅れた原因と見なす観点が相変わらず有力であった。たとえば、1988年に中央テレビで放送された黄河文明を批判するドキュメンタリーの「河殤」がその好例である。1990年代以降、伝統文化を評価し、その復興を推進する言論がようやく社会の表舞台に登場できた。その背景には、政府が伝統文化に対する姿勢が批判から推奨へと転換したことと、台湾や海外における新儒学の言論が大陸本土で急速に影響を拡大していることがある。前者は1989年に江沢民が、中国共産党の指導者として初めて公の場で儒学研究の価値と成果を肯定する講演を行ったことから始まり、後者は海外新儒家の余英時による「中国近代思想史における急進と保守」の講演を発端とした。伝統文化の中に潜んでいる人文性や民族性が再認識され、それが革命的な急進主義及び自由主義者の欧米志向に対する批判として注目が集まってきた<sup>6</sup>。

2000年代以降、グローバル化の加速につれ、伝統文化はソフトパワーとして政策的に位置づけられたほか、伝統文化の再確認を通して自国中心の認識を是正しようとする動きも学者の中で関心が高まった。たとえば、清華大学の汪暉が伝統中国と近代中国を論じる「帝国と国家」において、「帝国の問題を再びテーマにすることは、ナショナリズムの記述を強めるためではなく、その記述から抜け出るよ

うにするためだ」<sup>7</sup>と述べ、開かれた伝統文化の再構築が図られている。また、そうしたアカデミックな関心と相反し、一部の儒学者の中で復古主義的な動きさえ現れてきた。たとえば、当代大陸新儒家の代表者とされる蔣慶が読経運動を起し、儒学古典を子どもに暗記させようとし、もう一人の康暁光が社会主義的主張と自由主義的主張のいずれも中国の西洋化を図るものと批判し、儒教の国教化を唱えた。このような復古主義的な主張はリベラル派から厳しく批判されている。

### 3. 社会主義思潮の変容

三大思潮のなかで、唯一断絶なしに展開しつづけてきたのは社会主義である。ロシアの十月革命と国内の五四運動の下で誕生した社会主義は、近代中国が置かれている内憂外患の中で急速に大きな支持を得るに至った。「十五年間も立たない内に、中国青年たちの議論はほとんど1917年以前の西洋文明の否定に転じてしまった」<sup>8</sup>という胡適の1933年の指摘がそれを物語る。中国共産党は内部の路線対立および国民党との合作と分裂を経て、農村を拠点とする土地革命を展開し、階級打倒とプロレタリア専制を目指して革命を進めてきた。しかし、日中戦争が勃発後、共産党の一義的な目標は国の独立と民族の解放となり、プロレタリア専制が二義的な目標となった。後に毛沢東が発表した「新民主主義論」では、こうした趣旨がより明確に出された。

共産党以外の政党や勢力を部分的に受容する新民主主義路線のもとで、共産党は日中戦争、第二次国共内戦および建国初期の社会再建に取り組んできた。社会主義路線が再び共産党の一義的な目標となったのは、1953年以降となる。1952年末中央指導部は毛沢東の意見に基づいて新民主主義路線から社会主義路線への転換を図る移行期総路線を打ち出し、私有制の公有化などを進めた。急進的な改造

の下で1956年から社会主義的社会を迎えたと宣言され、その後工業化をはじめとする四つの現代化が進められるようになった。しかし、急進主義的な左傾路線の下で社会主義的近代化の実現を非民主的・非理性的な方法に訴えたが、最終的に社会の近代化を遅らせてしまう結果となった。

毛沢東が死去すると、文革路線に対する批判が表面化し、1978年以降国策が改革開放路線へ転じ、見習い対象も建国初期のソ連一辺倒から欧米や日本の先進資本主義国に変わった。しかし、こうした転換は社会主義体制の転換を意味していない。たとえば「現代化」の意味は依然として農業・工業・国防・科学技術の4分野に限定し、それ以外の分野の現代化の提唱は、しばしば社会主義国に対する西洋諸国の平和的な転覆策（「和平演変」）として警戒された。他方、80年代の言論界では文革への反省から、マルクス主義への関心が従来の階級闘争論から人道主義論に移り、マルクスの「経済学・哲学手稿」（1844年）が特に注目された。こうした動きは、当時政府からブルジョア的な関心による「精神汚染」と咎められたが、後に胡錦濤が提起する「人を本位とする」（「以人为本」）論の基礎となった。

1992年の鄧小平の「南巡講和」後、資本主義か社会主義かのイデオロギー論が棚上げされるなかで、政府はもっぱら経済発展に力を入れ、実用主義的な視点の下でより広義的な現代化に関心が生まれた。こうした背景では、政治的イデオロギー論に拘らない「現代化」の概念が言論界から提起されるようになった。たとえば、北京大学の羅榮渠が「現代化」を、工業化とそれにとまなう社会の一連の変化という広義的な理解と、後進国が先進国を追いかけ、追い越すために行った広範な社会改革運動という狭義的な理解から解釈を行った<sup>9</sup>。また、ポストモダンについては、中国科学研

究院の何伝啓は「第二次現代化」論を提起し、農業社会から工業社会への転換を「第一次現代化」、工業社会から知識社会への転換を「第二次現代化」と呼んだ。これらの現代化論は言論界にとどまらず、2000年代以降ようやく政府にも採用されるようになった<sup>10</sup>。

他方、自由主義的な経済政策と保守主義的な文化政策を取り入れて改革を進める政府の姿勢に対し、民間からはむしろ格差などの社会問題への関心から資本主義批判と平等志向の社会主義を主張する声が1990年代後半からあがってきた。新左派と呼ばれるこうした思潮の提唱者は、西洋の左翼社会主義思想の理論を土台とし、中国が市場経済へと移行する過程であらわれた社会の階層分化、社会規範の喪失や社会問題などを資本主義社会化の矛盾が露呈したものとして捉え、格差の拡大は国内外の資本家が手を結んで搾取した結果だと主張し、毛沢東時代の社会主義の道を再評価する動きさえ現れている<sup>11</sup>。改革開放とりわけ市場経済以来「生産力の向上」に転じた政府の社会主義観に対し、毛沢東時代の「分配の平等」という社会主義観が訴えられたのである。

以上、改革開放以降、中国社会では社会主義志向が後退し、自由主義志向と伝統文化志向が高まりを見せているが、そのいずれも近代中国以来の遺産を批判的に継承しながら、今日の課題に対する主張として表れてくることがうかがえる。社会思潮の変化は学校教育にも反映されている。次の部分では特に中等教育の国語教育に注目し、その教学大綱または課程基準（日本の学習指導要領に相当）および教科書の分析を通して、求められる文化志向の変容を明らかにする。

## II. 国語教育の変容

中国の学校教育において国語教育を担う科目は、中華民国期に「国語」（小学校）や「国文」（中学・高校）であったが、新中国以降、話し言葉の「語」と書き言葉の「文」の両方を重視する趣旨から「語文」に統一された。語文科は、言語教育や文学教育のほか、政府のイデオロギー教育の場でもある。たとえば、1956年に出された小中高校の語文科教学大綱のいずれにおいても、語文教育を社会主義的教育を施す有力な道具と見なし、社会主義者や愛国者の養成がその目的と規定しており、また文革期に「毛主席の著作を活かし、毛主席に忠誠をつくし、毛沢東思想や毛主席の革命路線に無限に忠実する」<sup>12</sup>ことが求められていた。

1978年以降の語文教育は、文革期の過激な政治教育の是正から始まり、やがて改革開放路線をサポートする役割が求められるようになった。2000年代までの改革開放期に公布された語文科教学大綱・課程基準は、試行版や改訂版を含めて計13もあり、その中で示された語文科の機能によって4つの時期に区分することができる。それらの趣旨は表1で示されたように、70年代末から80年代前半までの第Ⅰ期では、階級闘争の文革路線を修正しながら政治教育の性質を強く引きずる時期であり、プロレタリアの政治に奉仕する人材の養成が求められた。80年代後半から90年代初期までの第Ⅱ期では、国民の文化的水準の向上を図る義務教育の推進につれ、語文教育の実用性がより重視されるようになり、一定の政治姿勢と文化を持つ社会主義的公民の育成が期待された。また、一部の地域の中学校では新版の教学大綱を試行するようになった。90年代後半から2000年代初期までの第Ⅲ期では、語文科の文化的性質が認められるようになり、民族文化と世界文化の両方から国民素質の向上が図られた。また、義務教育の普及に続いて後期中等教育の改革が中心と

なった。そして、2000年代初期から試行し、2000年代半ばから全国展開となった第Ⅳ期では、教学内容を詳細まで規定する教学大綱がより緩やかな枠組みで構成された課程基準

に取り換えられたほか、語文科の人文性や生徒の発達を促す役割が示され、人間そのものにいっそうの関心を払うようになった。

表1：各教学大綱・課程基準における語文科の性質と機能に関する規定内容の変容

名称	区分	公布期	対象	適用地域	語文科の性質	語文科の機能
教学大綱	第Ⅰ期	1978年(試行版)	中高校	全国	思想性・政治性が強く、特定の階級の政治に奉仕するもの	思想性も専門性も身につける人材の育成。
		1980年(試行版)		全国		
	第Ⅱ期	1986年	中高校	全国	学習と仕事の道具	理想・道徳・文化を持ち、規律を守る社会主義的公民の育成。
		1990年(改訂版)		全国		
		1988年(第1次審査採用版)	中学校	28の実験区		
		1992年(試行版)		実験区から全国へ		
	第Ⅲ期	2000年(試行改訂版)	高校	全国	交流の道具・文化の一部	民族の優れた文化の発揚と人類の先進的な文化の吸収、国民素質の向上。
		1996年(試行版)		2の省と1の市		
		2000年(試行改訂版)		10の省・市		
		2002年		全国		
課程基準	第Ⅳ期	2001年(試行版)	中学校	38の実験区から全国へ	交流の道具・文化の一部、道具性と人文性の統合	生徒の全面的発達と生涯的発達、個性的な発達。
		2004年(試行改訂版)				
		2003年(試行版)	高校			

出所：各教学大綱・課程基準に基づいて筆者が作成。

上記の語文科の趣旨を反映するように、語文教育の目標と教科書に取り入れる作品の採用基準も変化を見せている(表2)。語文教育の目標については、第Ⅰ期においてプロレタリア的な情操の育成など強い政治的姿勢が求められた。第Ⅱ期では社会主義的教養を求めながらも、知力の発達や愛国心の養成が重視されてきた。第Ⅲ期では様々な文化——伝統文化や現代社会の文化、また民族文化や人類の文化——に対する関心が強く求められる同時に、特定の観念に縛られない自由な創造力の育成や文化の多様性への理解が要求された。そして第Ⅳ期では理性的な態度とヒューマニスティックな愛情や美への感受性の養成が重視される同時に、民族振興の使命感とい

う民族本位の姿勢が要請された。

作品の採用基準も同様の変化を見せている。第Ⅰ期から第Ⅱ期まで、思想性が重視され、弁証法的唯物論・歴史的唯物論の世界観が反映された作品が求められていた。他方、第Ⅱ期からは、改革開放への奉仕も求められ、国の近代化に貢献する姿勢や時代の精神を反映する作品の採用が重視されてもいる。そして第Ⅲ期に入ると、伝統文化や民族意識を反映する作品、文化性の豊かな作品、社会の発展を反映する幅広い主題の作品の採用が推奨されるようになり、プロレタリア志向は薄れていった。最後に、第Ⅳ期の課程基準では、自然や人類への関心、個性の発達や人格の形成および文化の多元性の理解と尊重を促す作品

の採用が提唱されるようになった。

表2：各教学大綱・課程基準における語文教育の目標と作品の採用基準に関する規定の変容

		第Ⅰ期		第Ⅱ期				第Ⅲ期			第Ⅳ期		
		中高校		中高校		中学校		高校			中学校		高校
		1	1	1	1	1	1	2	1	2	2	2	2
		9	9	9	9	9	9	0	9	0	0	0	0
		7	8	8	9	8	9	0	9	0	0	0	0
		8	0	6	0	8	2	0	6	0	2	1	4
		年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年
		版	版	版	版	版	版	版	版	版	版	版	版
語文教育の目標（姿勢・価値観の面）	1	社会主義的自覚	○	○		○							
	2	プロレタリア的な情操	○	○									
	3	マルクス主義的な文章の風格を確立	○										
	4	共産主義的徳徳		○									
	5	視野の拡大・知力の発展			○	○	○	○	○				
	6	社会主義的思想・徳徳・品性			○	○	○	○	○	○	○	○	○
	7	健康的で高尚な審美観			○	○	○	○	○	○	○		
	8	愛国主義の精神			○	○	○	○	○	○	○	○	○
	9	個性や特長の発展・健全な人格の形成						○	○	○	○	○	○
	10	中華民族の伝統文化への愛情							○	○	○	○	○
	11	想像力と創造力の育成						○			○	○	○
	12	文化的品位と審美情緒の向上						○			○	○	○
	13	積極的な姿勢や正しい価値観の形成									○	○	○
	14	現代社会の文化と生活に関心を持つ									○	○	○
	15	文化の多様性の尊重、人類の文化の継承									○	○	○
	16	精神的世界を豊かにする									○	○	
	17	理性的な態度の養成									○	○	○
	18	文明的な交流と協力の姿勢									○	○	
	19	自然や生活への愛情											○
	20	芸術と科学技術における美の感受											○
	21	民族振興の使命感と社会的責任感の増強											○
作品の採用基準（姿勢・価値観の面）	1	政治性が第一、芸術性は第二	○										
	2	指導者・党・社会主義国への愛情	○										
	3	プロレタリアの情操・世界観	○	○									
	4	社会主義的自覚	○	○		○			○				
	5	共産主義的徳徳	○	○									
	6	思想性において優れた作品	○	○	○	○							
	7	国の現代化建設に奉仕する姿勢			○	○			○				
	8	弁証法的唯物論と歴史的唯物論の世界観			○	○			○				
	9	時代精神の反映					○	○	○		○	○	○
	10	愛国主義の精神				○			○			○	○
	11	高尚な道徳や情操							○				
	12	中華民族の伝統文化への愛情・民族意識							○			○	○
	13	視野の拡大に有利							○	○	○	○	
	14	文化性を持つ							○		○	○	○
	15	社会と科学技術文化の発展を反映									○		
	16	自然や人類への関心										○	○
	17	個性の発達・人格の形成										○	○
	18	文化の多元性の理解と尊重										○	○

出所：各教学大綱・課程基準に基づいて筆者が作成。

以上、改革開放後の語文科教学大綱・課程基準を通して語文教育の変容を分析したが、学校教育で実際に使用される教科書では具体的にどのような変化が生じたのだろうか。次は、人民教育出版社が80年代、90年代、2000年代に出版した中学校と高校の教科書を通してそれを確認してみよう。

まず、教科書に取り入れた作品の構成については、2点の変化が生じたことが確認できる。一つは、90年代までに中国近現代作品が多く選ばれたが、2000年代以降、中国古典と外国作品の割合が大きく増えたことである(表3)<sup>13</sup>。すなわち、中国の伝統文化に対しても外国の文化に対していっそうの関心を示していることがうかがえる。

もう一つは、この3種の作品のいずれにおいても、革命や階級闘争の視点を反映する作品が人文性や科学を趣旨とする作品に取り換えられている傾向が示されている。中国近現代作品については、従来中国共産党の指導者またはその擁護者による革命的主張や社会主義建設の成果を示すものが多かったが、2000

年代以降そのような作品が急減しながら胡適などの共産主義者以外の人の作品や以前敵対していた台湾作家の作品が多く取り入れられるようになった<sup>14</sup>。中国古典と外国作品についても、90年代までに統治者や資本主義社会への批判をテーマとするものが採用されてきたが、2000年代以降愛や平和といったヒューマニスティックなものおよび科学への関心を高めるものが増えてきた。

たとえば、高校の教科書に入っている『詩経』の古典について、80年代と90年代の教科書では『詩経』の中の「伐檀」(檀の木を切る)と「碩鼠」(大きな鼠)が採用された。その2篇はいずれも労働者の苦勞と労働者を搾取する統治者への怒りを反映する作品であった。しかし、2000年代に採用された『詩経』の作品は「氓」(人物の名前)と「采薇」(野えんどうを採る)になった。前者は男女の愛情を繊細に描いたものであり、後者は出征兵士の苦勞と故郷を想う思う気持ちを描いており、平和への祈念が垣間見る。また、外国作品の変容も表4の通りである。

表3：語文教科書における作品構成の変容

		1980年代		1990年代		2000年代	
		作品数	割合(%)	作品数	割合(%)	作品数	割合(%)
中学校	中国現代作品	122	53.04	167	61.40	93	33.94
	中国古典	95	41.30	86	31.62	138	50.36
	外国作品	13	5.65	19	6.99	43	15.69
	合計	230	100.00	272	100.00	274	100.00
高校	中国現代作品	99	51.30	79	50.97	34	34.69
	中国古典	81	41.97	64	41.29	46	46.94
	外国作品	13	6.74	12	7.74	18	18.37
	合計	193	100.00	155	100.00	98	100.00

注：①作品数については、たとえば一つのテキストに二つの詩や文章が掲載されている場合には二つの作品として数えた。②精読文、略読文、授業外閲覧文、授業外暗記漢詩、目録に入っているすべての作品を集計対象とした。

表4：語文教科書における外国作品の変容(高校の精読文の場合)

著者	タイトル	テーマ	1980年代	1990年代	2000年代
エンゲルス	マルクスの墓の前での講話	資本主義批判 または	○	○	
チャーホフ	箱にはいった男		○	○	○
バルザック	守銭奴		○	○	



ゴーリキー	母	革命の		○	
モーパッサン	ネックレス	理念		○	
A.M.ローゼンタール	アウシュヴィッツにニュースがない	平和			○
M.L.キング	私には夢がある	自由			○
カール・セーガン	宇宙の辺境	科学			○
エーリヒ・フロム	父母と子ども間の愛	愛			○
ルイス・トマス	生物としての社会	科学			○

作品採用の他、作品そのものに対する扱いにも変化が見られる。90年代までに、採用された作品の中に教学大綱の要求に相応しくない部分がある場合には、その修正が政治的に行われていた。たとえば、資本主義国の学者を中国の友人だと称えた表現（聞一多『最後一次講演』）や、革命の精神を描く作品における子どもにリンゴを食べさせたり夫婦で散歩したりするフレーズ（魏巍『誰是最可愛の人』）が、その政治的傾向または革命的気概を損なうことによって削除された。また、夜の月光を浴びている蓮を出浴したばかりの女性に譬えた描き（朱自清『荷塘月色』）がエロチックな表現と見なされ、三か月も髪を梳かなかったという人物描写（臧克家『聞一多先生的説和做』）が衛生的な生活を提唱する党の政策に相応しくないとされ、余儀なく修正された。こうした作品に構成された語文教科書は、「体をしっかりと包んでいる婦人のようで、党や国を愛し、貞操を固く守り、品性が高く、主流派の思想を持つが、『人間』としての趣と女性としての美しさが欠けている」<sup>15</sup>と人々に揶揄されている。90年代以降、イデオロギー教育の弱まりと著作権意識の高まりにつれ、作品に対する恣意的な修正が是正されるようになった。

また、掲載作品の変容のほか、同じ作品でもその解釈の視点が変わっている。海門師範学院の楊孝如は、改革開放後の教科書に採用された作品の解釈の変化について、「テキストに対する解釈の束縛が次第に弱まり、生徒により広い読解の空間と自由を与えるようになっていく」と指摘し、これは「生徒の個性的

かつ自立的な読解力の育成に有利だ」と評価している<sup>16</sup>。

解釈が変化した典型例として、魯迅の小説を挙げることができる。魯迅の小説は中国の語文教育の古典であり、長く取り入れられてきた。90年代まで、彼の小説に対する解釈は、革命的、闘争的なものであったが、2000年代以後「民族の魂」を改造しようとする魯迅の人文的な視点がより注目され、人物の内面性や人性の複雑さが配慮されるようになった。

たとえば表5は、魯迅の小説「薬」について、異なる時期の教科書で提示された解釈を示している。1982年版の解釈では、作品の趣旨を封建主義と資本主義革命への批判と見なしたが、1990年版の解釈では資本主義革命への批判ではなく、革命家への同情との視点に変わった。また2000年版になると、「悲劇」との解釈となり、強引とも言える革命的な解釈から作品の本来の趣旨に戻った。

ほかに、風景を描くエッセーの中に革命の精神を見出したり、庶民の生活を語る小説から旧社会の統治者に対する階級的な批判を掘り出したりするなど、特定の価値観のもとで行われた解釈が、90年代までの語文教育ではほとんどであった。それに対し、2000年代以後、作品が持つ豊かな要素を生徒自身に感じ取らせるような緩やかな指導に変わっていった。つまり、作品を解釈する視点が、権威主義で特定の価値観への誘導から、主体的で個性的な理解の受容へと進んだのである。

表5：高校の語文教科書で魯迅の「薬」に対する解釈の変容（下線引用者）

教科書	解釈の提示
1982年 版	これは、魯迅が「五四」運動の直前に書いた辛亥革命期の中国社会の現実を描いた小説である。作品は、華と夏という二家族の悲劇を通して <u>封建制度の罪悪を告発し、封建的統治階級が革命を鎮圧し、民を愚弄する反動的な本質を暴いただけではなかった。もっと重要なのは、封建制度を倒すために犠牲になった革命家の夏瑜の血が、まさに貧民の華老栓夫婦が息子の病気を治すための「薬」になったという意味深い事件を通して、辛亥革命における革命家と民衆の関係を提示し、民衆からかけ離れた資本主義の旧民主主義革命の過ちを批判し、一つの側面から辛亥革命が失敗した歴史的な教訓をまとめた。この作品は次のことを教えている。つまり、民衆を動員する以外に革命は勝利できず、中国を救うことはできないということである。</u>
1990年 版	「薬」は辛亥革命期の中国社会の現実のある側面を示した。作品は、華と夏という二家族の悲劇を通して <u>封建制度の罪悪を告発し、封建的統治階級が革命を鎮圧し、民を愚弄する反動的な本質を暴いただけではなかった。もっと重要なのは、封建制度を倒すために犠牲になった革命者の夏瑜の血が、まさに貧民の華老栓夫婦が息子の病気を治すための「薬」になったという意味深い事件を通して、民衆の愚昧と革命家の悲哀を表したのである。</u>
2000年 版	「薬」は辛亥革命期の社会現実を背景とし、光復会のメンバーである徐錫麟、秋瑾が清政府に殺害された事件を手掛かりに、 <u>革命家たちが民衆のために犠牲になったのに、民衆たちの理解が得られないという悲劇を描いた。</u>

出所：楊孝如「1977年以來中學語文教科書對課文解讀的影響論析」『寧波大學學報（教育科學版）』第27卷第1期，2005年2月，p.111.

以上、語文科の教学大綱・課程基準および教科書の分析を通して、改革開放以降の語文教育は確実に一元的な価値志向と政治的プロパガンダの性格を持つ教育から、民族文化と欧米の近代文明をより評価し、多元的・ヒューマニズム的な価値志向を追求するものへと転換していることが分かる。

#### IV. おわりに

政治的な国語教育が文化的な国語教育への転換は、教育改革の第Ⅲ期と第Ⅳ期とりわけ2000年代以降図られてきたが、この時期は同時に中国がグローバル化の影響を大いに受けて社会思潮が多様化している時期でもある。それが国語教育への影響は、特に人文主義の台頭とその多義的な理解ということに見られる。

国語教育に対する人文主義的な主張は、80

年代後半から現れ、学校現場の教員、言語研究や文学研究の知識人、さらに民衆の要請の下で進められ、90年代後半語文科の人文性が教学大綱で反映されるに至ったのである。たとえば、語文科教師の陳鐘梁や若手研究者の韓軍の論文、言語研究者の申小龍による一連の主張、90年代に言論界における人文精神に関する大討論、さらに、90年代後半国語教育に関する国民的大議論などにおいて、そのいづれも国語教育におけるプロパガンダ的な作品や知識注入的な教学を批判し、感性豊かな人間の育成または民族文化の伝承について国語教育の役割を求めた。

他方、人文主義の主張に多様な理解が存在し、大きくは「民族性」と「普遍性」の二つの傾向がある。それは自由主義志向と伝統文化志向の高まりを社会背景としながら、個の解放と尊重を主張する民主主義の理念と民族や文化に価値を置くロマン主義の理念の両方

を内包している。「普遍性」の傾向では、西洋的な普遍主義を受け入れる部分と自らの文化の普遍性を主張する部分の二つが含まれ、「民族性」の傾向では、西洋的な普遍主義そのものおよび西洋理論の枠組みで解釈された中国の文化や言語に対し、自らのアイデンティティや特徴が主張される。

但し、自らの特徴とその普遍性を主張することは、必ずしも西洋との「敵対」を意味するのではなく、そこには西洋も自分も対等の存在としてとらえようとする姿勢もうかがえる。たとえば、申小龍は中国語の個性を主張すると同時に、人類の言語に共通性が存在することも強調し、真の共通性を見出すために、個性研究の意義があると指摘した<sup>17</sup>。また、グローバル化の時代において、西洋文化の影響力が拡大するなかで民族文化の周辺化を懸念し、自らのアイデンティティの確保と他文化との融合という対立を解消するように、民族文化における普遍的な価値を持つ部分を国語教育によって強化する意見が上がっている<sup>18</sup>。こうした「民族性」と「普遍性」の両方に進む傾向は、人文主義の趣旨が反映された2000年代の教科書で、中国の古典も外国の作品も両方増えてきたことから確認できよう。

今日、国民教育の基本として国語教育の改革はますます社会から注目され、掲載作品の変更はしばしば大きな議論を巻き起こすことになる。たとえば、革命を扱った作品の定番である「狼牙山の五勇士」(抗日戦争での英雄像を描いた内容である)が削除された時、魯迅の小説が人気のある義侠小説に取りかえられた時、私的な利益を肯定する経済学者の文章が取り入れられた時など、世論はいつも沸騰してしまう<sup>19</sup>。国語教育は政治的イデオロギーや権威主義から自由になる一方、今後は社会思潮からの影響をより大きく受けることになるのであろう。

#### 脚注\*

- <sup>1</sup> 名古屋経営短期大学子ども学科講師。
- <sup>2</sup> 許紀霖 [25], p.482.
- <sup>3</sup> 朱維铮 [33], p.6.
- <sup>4</sup> 「新儒学」には、第一期の秦以前の儒学に対し、宋と明において新しい解釈が行われた第二期の儒学および、五四運動後現れた西洋化の主張に対して伝統文化の価値を主張する第三期の儒学がある。そのうち、前者が「宋明新儒学」、後者が「現代新儒学」と呼ばれるが、今日一般的に使用されている「新儒学」は、特に説明がない場合に後者を意味する。方克立 [2], pp.10-13.
- <sup>5</sup> 方克立 [2], pp.56-57.
- <sup>6</sup> 他に、中国社会に実際に根強く存在する伝統文化の影響をいかに克服または活用するかという社会学の視点、または日本やシンガポールのような儒教文化圏の経済発展に注目する経済学の視点など、思想や文化論以外の観点から伝統文化への関心を促した要因も存在していた。
- <sup>7</sup> 汪暉 [21], p.12. 但し、汪暉は保守主義者というよりは、新左派の代表論者と見なされている。
- <sup>8</sup> 胡適 [5], p.311.
- <sup>9</sup> 羅榮渠 [14], p.17.
- <sup>10</sup> たとえば、2000年代初期政府のシンクタンクである中国科学院に中国現代化研究センターが設立され、国家戦略として総合的な近代化研究がスタートした。そこでは、羅と何の理論を元に、西洋と中国の「現代化」理論をまとめている。中国現代化報告課題組 [31].
- <sup>11</sup> 簫功秦 [24], pp.9-10.
- <sup>12</sup> 朱志勇 [34], p.52.
- <sup>13</sup> 他の注がない限りに、本文で分析対象の教科書が注 [35] の通りである。

- <sup>14</sup> 武小燕 [23], pp.8-10.  
<sup>15</sup> 潘曉凌 [16].  
<sup>16</sup> 楊孝如 [29], p.114.  
<sup>17</sup> 申小龍 [18].  
<sup>18</sup> 劉忠華 [12].  
<sup>19</sup> 璩毅 [17].

\*参考文献

- [1] 陳鐘梁「是人文主義，還是科學主義？——語文教學的哲學思考」『語文學習』1987年8期，pp.2-4, p.56.  
 [2] 方克立『現代新儒學與中國現代化』長春出版社，2008年。  
 [3] 高力克「『新青年』與兩種自由主義傳統」許紀霖編『二十世紀中國思想史論·上卷』東方出版中心，2000年，pp.126-139。  
 [4] 何佺啓『第二次現代化——人類文明進程的啓示』高等教育出版社，1999年。  
 [5] 胡適「建國問題引論」（1933年）羅榮渠監修『從「西化」到現代化』北京大學出版社，1990年，p.311。  
 [6] 康曉光「我為什麼主張『儒化』」<http://history.book.163.com/10/0124/17/5TQEO0GF00924472.html>（2012年2月24日閱覽）  
 [7] 課程教材研究所編『20世紀中國中小學課程標準·教學大綱匯編 語文卷』人民教育出版社，2001年。  
 [8] 李世濤監修『知識分子立場——激進與保守之間的動蕩』時代文藝出版社，2000年。  
 [9] 李世濤監修『知識分子立場——民族主義與轉型期中國的命運』時代文藝出版社，2000年。  
 [10] 李世濤監修『知識分子立場——自由主義之爭與中國思想界的分化』時代文藝出版社，2000年。  
 [11] 劉增人·馮光廉編『葉聖陶研究資料』北京十月文藝出版社，1988年。  
 [12] 劉忠華「文化全球化背景下漢語文教育的思考」『當代教育論壇』2007年10期，pp.97-99。  
 [13] 羅榮渠監修『從「西化」到現代化』北京大學出版社，1990年。  
 [14] 羅榮渠『現代化新論——世界與中國的現代化進程』（增訂版）商務印書館，2004年。  
 [15] 歐陽哲生『自由主義之累——胡適思想的現代闡釋』上海人民出版社，1993年。  
 [16] 潘曉凌「教科書：刪得掉的文字，刪不掉的秘密」<http://nf.nfdaily.cn/nanfangdaily/nfzm/200906250123.asp>（2012年2月24日閱覽）  
 [17] 璩毅「中學語文教材改革網上民意爭鋒」<http://news.sina.com.cn/c/2007-10-31/115014204023.shtml>（2012年2月24日閱覽）  
 [18] 申小龍「關於語言的共性問題——漢語人文性答復之一」『語文建設』1988年3期，pp.12-18。  
 [19] 申小龍「漢語的人文性與中國文化語言學」『讀書』1987年8期，pp.114-121。  
 [20] 申小龍『語文的闡釋——中國語文傳統的現代意義』遼寧教育出版社，1991年。  
 [21] 汪暉『現代中國思想的興起』三聯書店，2008年。  
 [22] 汪瑩「我國中小學語文討論的回顧與啓示」『全球教育展望』2001年3期，pp.28-33。  
 [23] 武小燕「中國の学校教育における愛國主義教育の変容——政治・歴史・語文に見られる価値志向の分析——」『中國研究月報』第65卷第12号，pp.1-14。  
 [24] 簫功秦「現代中國の知識人の思想分化とその政治的影響」『現代中國における思想、社会と文化——中國文化とアジア世界の文化共生研究会 COE 最終報告書——』愛知大學國際中國學研究センター，2007年，pp.3-25。

- [25] 許紀霖「社会民主主義的歷史遺產——現代中国自由主義的回顧」李世濤監修『知識分子立場——自由主義之爭与中国思想界的分化』時代文芸出版社，2000年，pp.474-486.
- [26] 許紀霖編『二十世紀中国思想史論·上卷』東方出版中心，2000年.
- [27] 許紀霖編『二十世紀中国思想史論·下卷』東方出版中心，2000年.
- [28] 薛涌「走向蒙昧的文化保守主義——評蔣慶的讀經運動」<http://gb.cri.cn/3601/2004/09/15/342@300951.htm> (2012年2月24日閱覽)
- [29] 楊孝如「1977年以來中學語文教科書對課文解讀的影響論析」『寧波大學學報(教育科學版)』第27卷第1期，2005年2月，pp.109-114.
- [30] 余英時「中国近代思想史上的激進与保守」李世濤監修『知識分子立場——激進与保守之間的動蕩』時代文芸出版社，2000年，pp.1-29.
- [31] 中国現代化報告課題組『中国現代化報告2001』北京大學出版社，2001年.
- [32] 「中央關於西安事变和平解決之意義及中央致国民党三中全会電宣傳解釋大綱」[http://news.xinhuanet.com/ziliao/2004-11/30/content\\_2276776.htm](http://news.xinhuanet.com/ziliao/2004-11/30/content_2276776.htm) (2012年2月24日閱覽)
- [33] 朱維铮『梁啟超論清学史兩種』復旦大學出版社，1985年.
- [34] 朱志勇「我国小学初中語文教学大綱的演進——價值取向的分析」『上海教育科研』2002年11期，pp.50-54.
- [35] 中學校用教科書：80年代：人民教育出版社中學語文編輯室編『語文』(中學校)，1981年(第一，三冊)／1982年(第二，四，五冊)／1983年(第六冊). 90年代：人民教育出版社語文一室編著『語文』(四年制中學校)，1992年(第一冊)／1995年·第2版(第二冊)／1993年(第三冊)／1994年(第四，五冊)／1995年(第六，七冊)／1996年(第八冊). 2000年代：課程教材研究所·中學語文課程教材研究開發中心編著『語文』(中學校)，2001年(7學年上冊～八學年上冊)／2002年(八學年下冊)／2003年(九學年上冊，下冊). 高校用教科書：80年代：人民教育出版社中學語文室編『語文』(高校)，1983年(第一冊)／1984年(第二，三，五冊)／1985年(第四冊)／1985年(第六冊). 90年代：人民教育出版社語文二室編『語文』(高校)，1990年(第一冊)／1995年·第2版(第二～五冊)／1991年(第六冊). 2000年代：人教教育出版社課程教材研究所·中學語文課程教材研究開發中心·北京大學中文系語文教育研究所編著『語文』(高校·必修)，2004年(語文1～5).